





百韻

聖のまもきく人忍ぬ梅哉茨木連中ト子

ぬちううと玄関所の香女媒

喜如川路次出る鮎子身著し亀旋

左右ハ日南法川ほとと鶴南取

三河巴ヤンゴヤ路く喜縁し昔河童

援カぬ法もり此及の打ゆ浦仙



山色多を此に桂の男我意 文扇

鳴呼新田姫 烏よき色 執筆

村まの車巻を操 贈の夢 里丸

穂して知りし伯父の投婦 永入

やまの傾城さういし 清水古 女媒

河川まら響よまの川まら 輓 卜子

長袴のやとりみ能 法へて来る 亀旋

后より低い町に竹鞋全 河童

釣鐘の音も何よりでうらま 南来

細くひのほろ鼻よ紙の塗 卜子

娘の落身もよの程よ吹夕阿し 甫仙

面白きうら聞由接舌 文扇

他よと此事にて悔るる 縁月 永入

無心道も賣よ其の是 里丸

吹時小州の形りきる土筆 卜子

景よ法よまれ ぬき建き 志 亀旋



燒人と連る川村の豆腐茶 文扇

りひ合せきり時雨まの風 甫仙

結ゆきんと紅い萍とさ梅のき 龜旆

夜月と文のなきき射しぬ 文扇

両方うま入して存る新ぼろし 河童

立枝木のくえ川あらん海 浦味

凍解ふ為し物う唯是来不 里丸

價のう物に始 妻音 定貫

批嘆くぞ月と詩經と娘よか ト子

うのうと 妻媒と片毫 龜旆

勤書と形月して伝を出閑帳 甫仙

うろはくもる (秋の夕暮 永入

ち川とと樞機と月の暈と星 女媒

お葉のうと 漏りたうお空根 文扇

ワ 竹の春さうても世間と花の内 浦味

浪のうはきと石之 吹上 甫仙



橋の下ぐらにれやうよ舟の出 文扇

ちよとよれい凍の橋と葦葦 南畝

子の産く葦おろしよと器深き 定貫

鶯より鳥鶯の鳴り空 卜子

厚髪ハ酒氏雲うろ思ひはき 永入

少う惚の中はあつても神 定貫

よい差、鳥東照るにえ照る 河童

鶯鷲を仕込、程の初孫 里丸

働く虫水ハあつても水車 永入

一代能ハ酒溜は井戸 南畝

はのうたお良枝の臺所 甫仙

摺待の釜作うろ見 女媒

三 秋風の法きよき川もる松拍 河童

てん子又負ぬ膝が早川 定貫

柳を縁はハあつても氷る 亀旋

更と研のやんれりけり 甫仙



降る小降り波乗り山崎村の落 河童

山の真面目牡丹位三まり 永入

札さたせと練うらま色して 里丸

存分りきく仕事心永き日 定貫

大道い人まをせ好うらりうま 女媒

いりちきいさぬ奴り先達 河童

二升樽酒さく通る樽木所 里丸

丹青あも色 浪里五て紫鶴尻 定貫

得んもいせに三日の目下入 河童

麻餅キ山人為息かき子孫 文扇

具足櫃あがるをれと思し替る 卜子

庄敷をまゝあ虫干の川 永入

紋日さふかひ法がうより様々習ふ 里丸

あぬと知しある 枕さきび一抱 文扇

おどろく吹きあされ雪れをいりし 定貫

世を破りて素袍着る人 卜子



登の月夜登見よを河川あり 浦東

又と遊ひけし遊くまのあ 浦仙

石とあふぬ所の咲も花賣るあ 文扇

関り助言く肩子遊るあ 定貫

肩と肩押合ふてゆきあり 永入

連と夜ふけありし 香 龜施

見しし堂よりを元土産のあ 女媒

怪人むきあつるあ 浦仙

+

弥生空 古柳の及花根より 龜施

あはしをすてあはるあ 浦東

於糸の押うけあは定子入り ト子

水ぬけあは 瀬 里丸

雲とあふのあはし 下りる雲母坂 永入

よあふあはしあはせんあ 定貫

真しりりあはのあはしあはし 女媒

朝日を流髪水ハ川 御衣



思ひ事し集しる程の多しなり 南原

三里に付ハ五里河との土 里丸

十二羽投ッちきぬらち丸と立 柳松

習きを尋ねし(かぶく) 河童

先場ふを賣ぬり月の新若所 亀旋

ほうぞぬらふ芭蕉舞まれ 定貫

船の舟舟ハ大坂の秋も更 文扇

入日をもし(くも)はつと 乃 亀旋

物怪も竹上 課せし衣は是尺ハ 甫仙

木のこもみざりえを 髪まきり ト子

かこもみ入 劍よハ中ハ垣て凍 河童

岩を懸あさり 着よ吹風 女媒

待てておのこもし(くも)はつと 永入

あふめとはく(くも)はつと 春州 只之



一代能六日番組

歌仙

高砂 松夫婦をや路の 志を重ぬ 昆陽 占屑

赤廣 糸の縁より 借りし傘 日向 鳥枝

熊野 山よくと鄙の 重ぬれ呼立て 萱野 只之

萩大谷 何ぞといふを 似合ふ束帯

融 某家ゆく煙の見へし 浦の月 鳥枝

養老 石標の 影を 浴びあはく

賀茂 ウ 一疋の 蜻蛉 阿ま路を 舞かたまり

新宜炭 川く持合し 大畏の 植 占屑

八島 又喧嘩を ぐお阿ひき 遠へ

難庵丁 蓮婆の 料理ちり 雨作色 只之

江口 君哉と 惜むら 死と 妻か事

耶那 某店に 昼寝おぼり 午時 占屑

竹生島 年ごとく 身身けし 物 箱

貳千石 繭も 糸々と よう 呵る 毛見 鳥枝



半蔀を関へ扇よせせてふとく一采 多枝

髭やうら 医のまゆへくごはるど刺るぬ髪 只之

道成寺十貫法師のまきき 所 ぬく 占屑

巻衣 諸子法師のしんと持鶴追ふ 占屑

百万 <sup>二</sup> 乞ひく女のまはる庫裏方丈 多枝

三人支離 練り響のふく 後朝 占屑

龍田 毒ふも持りも望るる番を付ケ 占屑

花子 鳥と燕ハ去ノよたろよ 只之

小原御幸 日暮る地獄のうぬ月と入三

海士 てむのいぬ 賣帳当座帳 占屑

白楽天 二代目の詩を歌ふる柳きうと

春をどうむり 居と竹林 多枝

杜若 ハ糞ぐ月見法師も打忘る 只之

釣瓶 燈籠法師高き異見ふる伯父

通小町 秋風の吹ふ付てもうらな 窓 多枝

安宅 けり燈籠しぬさ 綱さ 占屑



芦刈 <sup>ウ</sup> かめく 神皇 立脚よ 夕日 影 古屑

宗論 鐘撞 佛のやんばや ぬれき

壊棄 捨るもて 山きよらうしと みるく馬 烏枝

栗焼 ろせる 大釜ニ 丁きあふ

大會 学の人又 莞ぬき 禮を 清 只之

猩々 もも ぬぐし いと 旋 執筆

歌仙独吟

上ノ山阿彌十産子出方ノ會  
中ニ有ルと世ニ初兩略之

都省の 静きも 知き 夏の海 <sup>中之城</sup> 女 媒

暑を 静きしと 打まら 水 <sup>南 味</sup>

雅子方 舞の 月夜 執持く

繫し 鈴の ざりやと 一時

空と ぶねを 見せたる 自の 山

夢の あり 海へ 厚く 住 如 是



山雀の藝ハかきうぬ子年忌

田園親父市馳走の由

何くうぬ息して指くも思ひ切

羊羹の糸とり付と又

水車掠と今よ水くあま

畑建堂して松を育む

町利保の海敷あきしと付と宝

純粋のあきしと付と宝

曆くハ十五折られと歩走空

舟のて笑ひはめれとる砂

漫あうりよ海舟入るる茶の寺

為せし角よ響きまもせは

日本の曲水蒙衣脱ちし

嫁よなまやと又やまのうけ

大床よ思ひ切るる腕しやう

上よとく何の昔よ照し



牡丹見り雪掃除きを見し去り  
 おもひ中津さうお五月る  
 よろこびも毎（あれと先り續き  
 運り初秋 新こおしを  
 跡る暑よ又入夏子まらるる  
 暑し〜と掛る二日月うら  
 鳩平家の穴もあつとはやうぬと  
 めい〜も傳へて居る

7

一昨日の使者柄き新あま物も巻  
 よろこび五尺百里暮る状  
 所、大位〜及檣あえて足は  
 流る泡のおき〜と  
 自由たつた〜の奥  
 社立際〜雪解る山







神主ハ仲若呼も目も好も  
 出整うも進ての途る 武士  
 幕の内外トうしと 意は  
 喜の流よぬあまの川  
 又 澄合日よりも長うまも  
 桂馬のちのう 角もたあり  
 若我のさうり 豊川 虎々 雨  
 為付く 吾也 卑の良

二

蟹の目れも〜〜もえ〜まの  
 梅もまの雪 月ももほり  
 旅終至の 藤園 之を 讀き  
 堂 新しく 四五正の 鳩  
 小舟女的首 景 結む ぬり  
 花も中一の 物 名 名 名  
 園の 意を 屏風 して 引ま  
 大勢の 渡 染の 志 所 志



夕 夕為と見え尻うらむむの

よの木の如き一床全代官

増切の皆死まうぬ石のまゝ

かゝりしと意地し石と朱楠

為守のまゝとわがは破法

一筋道を 澗と流るる

歌仙婚礼

伸身亀長閑なりさきま石 燕持古 亀旋

ぬをまゝとまゝとまゝめい磨斗 河童

て色永いまゝと五日明るて 南取

小角の隅も丸う形りまゝと 亀持

之方の横程者る十六枚 河童

六枚川て現くひうう山雀 南取



ワ  
行列（地分さし）新 襦 亀 拖

高 簪の 飯 法い 倉 戸よと六 河 童

は 分ハ 部 全くと 文と 状と 撰 南 取

破 せく 色を 虫を ちの 恋 亀 旋

垣 鞠 色 燈 として 時 宜 する 使者 奏 者 河 童

簪 立し 荷 桶 貝 桶 南 取

月 代よ さり 尻 土 器子 雲の 象 亀 旋

やと 一子 押ハ 虫 一し 虫

格 立の 阿 乃 さし か ます 七 五 三 河 童

加 乃 漆 此を 向り 志 虫 一

け 交の 忌 此 情とハ 異 服 方 南 取

サ ン 虫 一 本 具ハ 紫 此 虫 一

二  
佐 保 姫の 持 糸 山しハ 重 履 亀 旋

水 引を 袋 飾 一し 蝶 形 河 童

目 如 反 日 笑 止 分 程 一 閑 一 一 南 取

心 の 虫 一 伸 一 一 髪 亀 旋



君爰子志々うり哉 白小袖 河童

今友の簪が又唐搦虫 南畝

引合を九十之騎の明を礼せ 亀旋

玄関の躰乃かり舟を搦 河童

後の若此月おもるるし月ありと 南畝

ゆふさびし目士さむく萩萩 亀旋

執持も鴨上戸 梅ささる 河童

志ささる 門を兄志と違へ 南畝

ウ

法を雖出入 船く(ささる) 亀旋

波草の裾乃執きさ 浪 河童

五十荷乃法東坐ても 同一世 南畝

娘のまふ 蕨舟の湯 亀旋

耳ありを墨の結ふ乃神あり 女媒

美少女のあひぬ 妻の禮 執筆



歌仙

名草や子々女房のちろろへ 南歌  
 漬しうねのく文子春風 女媒  
 天り下さるる( )の凍解し 文扇  
 ちろろ水の近る塗物 南仙  
 志よる( )雲る七月の白をせは 女媒  
 波のさるの枝は見晴れ 南歌

吹之も時を為し練曲し 南仙  
 蒙衣を河のき飽は御整地 文扇  
 幸宅子 意を一年一括里 南歌  
 いろなる藝し暖暖は半年 女媒  
 水高ふさむとせはう思ひは 文扇  
 榮耀の外は縁の曙 南仙  
 まゆ程の事を土公ら丸のか乃 女媒  
 ちろろ( )涼し夕暮の月 南歌



柳をくたき五月の初洗泉 文扇

鶯を目あふ池を返す竹 女媒

銀息子をくたして老りあそぶ方 甫仙

美を泳ぎ日人を蝶く 文扇

海の面以千の用なき鳥も 甫取

景の櫻を食むる後の石山 甫仙

鶏をききいぢうしく泣きあはる 女媒

みして夢の仲人の 供 甫取

死ぬべきは鶴甲の精 鶴の首 文扇

櫻舟うろ 洛陽へ言傳 甫仙

見ぬかたのこころをわづらひ 文扇

神馬の鳥くはひのこころ 文扇

あしうをたててゆくかたぬ成り香車 甫仙

菴主の強走ぬまり香車 女媒

阿の程の池をききけり 文扇

まご 画きあえゆる 牡丹花 甫取



霧の夜も 夢を仕立てし 又鶴尻 女媒  
 脱ぎの 着る 傾城の 丹まき 甫仙  
 薄く ぬる 草を 苦み する 如 壺 菊 味  
 洗ひの 伸せぬ 神柱の 枝 文扇  
 曇の 目も 蕪く 覚悟の 近 飢へ 女媒  
 二わく 一 裁 一本 乃 独活 執事

歌仙

春先の 菜乃 水や ちみ 餅 細田 縮門  
 春に 位を 観ふ 茶 菜 女媒  
 縄 心の時を うらな 丈取 五日市 柳司  
 鬘 刺 切 けり 所 や ぬき たり  
 川 泊を 述めて 存る 自 石 所  
 連 阿 房 籠も 秋の 泣き 縮門



夕  
育のやが乳母をかく泣く為水 稲門

悟の果もわりの肝積

錦標の鳴り止付いさやまて 柳旬

ふきのうら子 巻くほねる

愛宕山 巻ふていえの土と成

細干ス 船ハ沖乃 巻砂 稲門

乙の村 巻う 山の地 巻虫

くわりの 巻 照る 巻る 月

草花の 巻 巻る 巻る 巻る 巻る 柳旬

巻 組 巻る 巻る 巻る 巻る

懐を 巻る 巻る 巻る 巻る 巻る 巻る

巻る 巻る 巻る 巻る 巻る 巻る 稲門

水ぬる 巻る 巻る 巻る 巻る 巻る

犬の 巻る 巻る 巻る 巻る 巻る

巻る 巻る 巻る 巻る 巻る 巻る 柳旬

巻る 巻る 巻る 巻る 巻る 巻る



思ひ夜の常の建より極り極め 柳司

自分の半成候うらやま心 稻門

罪科は餌ご心を仕ふるを至断

六つうーかん観音の奉

仏ありてはまゝぬ先を所新石

縁心の始りたよある家 柳司

歌へて謡へ夜る元日月

魂分の心集袖見送里

ウ

蓋玉のふまゆらんさびの所室

こまき語を走る路出し

琴の爪交ても阿古菴の菓子 稻門

竹の秋暮く写る一夢

香合もけ薬をむき法意の布

安堵のあま風巾の中回心 柳司



梅ハ甚だおもむきまこと花は津  
うらやまあまうこも花下けき世  
梅ハ大代の本立ゆりく木きを  
北風吹下古風の色ありて又色  
かこしとふらんとて月小神さく  
鞠まぬこふきく能きや形丸  
昔きまらんや島流をまきと  
是小敷く谷河のもむ川にき  
曉こと咲きくもるまこと梅こ  
みつこも花屋侍にきく磨土  
海棠梨茶のさうめも梅の後  
花きのしんあつてきく形丸本なる

ふもくは花はきくの花を花  
とふりて魚の心はきく色  
褒美のききくこのと花あま  
花花ありはとてあま一花一西  
盆のきくといふ花といふ花  
まきくは其花のあま一花  
は歌まの花のあまのあま  
こもくはまきくはまきくは  
くまの園とては花の鶏蹄  
しきまの我家よあまの我  
はこもく

かもの花とあまの科の梅哉 方繁



梅

梅の影を竹筒押花むめはる京 喜見

昂室の 茶子庭心く

春も人の 旅に 散花 花車 万

かくて暮し 此夜は 弾あり

あふあり 瓶ありして 心あり

あふあり 瓶ありして 心あり

あふあり 瓶ありして 心あり

別と暮し 後家へ あり 梅哉

ひと日 花う 山端の 寮  
よ庭心く

はくし 末の 首さく 此く あり 梅哉

三如 月中の 六日 初更  
まじの 藤子 宴を

月の 心 関面 白く 夏本 終

某年 九月 十三日 初吟

るく 月あり 風あり 光あり

あふあり 瓶ありして 心あり

太子 あり 梅あり 某あり 後あり 月



冬

雪の人の一番二番鶏 喜見  
決堤く割く火も出ん厚氷

四季の海鳥

蝶く七一本の鳥肉、巻く車 寒白

祝氷餅

海鳥の元節の似の氷室哉

良夜

石鳥や柴の籠もまの餅

冬旅吟

とほふ雨もまの田の氷

四季

雪を又笑む姿あり夕櫻 橘雨

櫻まの湖の華は涼をれ

爰も美紅紫よまの蟹一箇

小妻の鳥は鳥師隨せよ海り迄



なまは津の  
棠を

梅咲やなまは津津輕鼻の穴 蟻卵

目川の茶店を

卯の茶此雪の幣も何の塩加減

秋

熊売ぞいし子抱草幹哉

冬

盲人もこの世のくひ言さるれ

歌仙

舟引やこの世の笠の嶋牛 黄後

大さのまにかま竹の風 女媒

道清兄が潮まがけし 春

養猪と犬坂で身ゆるる 黄後

まろ入し洗濯まはる月の山

二千一年の櫛を能く 女媒



さの<sup>ッ</sup>去<sup>ッ</sup>又<sup>ッ</sup>妹も見<sup>ッ</sup>（さ<sup>ッ</sup>燕の巢 女媒

井戸も汲干<sup>ッ</sup>智織<sup>ッ</sup>を<sup>ッ</sup>て<sup>ッ</sup>た<sup>ッ</sup> 黄接

二世<sup>ッ</sup>との外<sup>ッ</sup>順<sup>ッ</sup>禮<sup>ッ</sup>の<sup>ッ</sup>夫<sup>ッ</sup>如<sup>ッ</sup>連<sup>ッ</sup>、

す<sup>ッ</sup>こ<sup>ッ</sup>物<sup>ッ</sup>強<sup>ッ</sup>子<sup>ッ</sup>形<sup>ッ</sup>ぶ<sup>ッ</sup>之<sup>ッ</sup>間<sup>ッ</sup> 女媒

脂<sup>ッ</sup>の<sup>ッ</sup>心<sup>ッ</sup>松<sup>ッ</sup>達<sup>ッ</sup>者<sup>ッ</sup>さ<sup>ッ</sup>ら<sup>ッ</sup>は<sup>ッ</sup>通<sup>ッ</sup>り、

泉<sup>ッ</sup>水<sup>ッ</sup>の<sup>ッ</sup>後<sup>ッ</sup>る<sup>ッ</sup>子<sup>ッ</sup>如<sup>ッ</sup>く<sup>ッ</sup>ま<sup>ッ</sup>分<sup>ッ</sup> 黄接

雪<sup>ッ</sup>原<sup>ッ</sup>の<sup>ッ</sup>意<sup>ッ</sup>い<sup>ッ</sup>ま<sup>ッ</sup>ん<sup>ッ</sup>さ<sup>ッ</sup>ら<sup>ッ</sup>形<sup>ッ</sup>さ<sup>ッ</sup>り<sup>ッ</sup>あ、

阿<sup>ッ</sup>比<sup>ッ</sup>羅<sup>ッ</sup>が<sup>ッ</sup>硯<sup>ッ</sup>屏<sup>ッ</sup>の<sup>ッ</sup>こ<sup>ッ</sup>ら<sup>ッ</sup>り 女媒

さ<sup>ッ</sup>い<sup>ッ</sup>等<sup>ッ</sup>之<sup>ッ</sup>子<sup>ッ</sup>月<sup>ッ</sup>も<sup>ッ</sup>出<sup>ッ</sup>て<sup>ッ</sup>見<sup>ッ</sup>る<sup>ッ</sup>も、

意<sup>ッ</sup>を<sup>ッ</sup>息<sup>ッ</sup>杖<sup>ッ</sup>之<sup>ッ</sup>所<sup>ッ</sup>と<sup>ッ</sup>能<sup>ッ</sup>を<sup>ッ</sup>腰<sup>ッ</sup> 黄接

か<sup>ッ</sup>（日<sup>ッ</sup>雇<sup>ッ</sup>兼<sup>ッ</sup>の<sup>ッ</sup>根<sup>ッ</sup>分<sup>ッ</sup>子<sup>ッ</sup>下<sup>ッ</sup>せ<sup>ッ</sup>は<sup>ッ</sup>き、

彼<sup>ッ</sup>岸<sup>ッ</sup>赤<sup>ッ</sup>石<sup>ッ</sup>雪<sup>ッ</sup>踏<sup>ッ</sup>志<sup>ッ</sup>あ<sup>ッ</sup>ら<sup>ッ</sup>し 女媒

二 玄<sup>ッ</sup>関<sup>ッ</sup>ハ<sup>ッ</sup>今<sup>ッ</sup>子<sup>ッ</sup>律<sup>ッ</sup>吹<sup>ッ</sup>か<sup>ッ</sup>血<sup>ッ</sup>全<sup>ッ</sup>一<sup>ッ</sup>た、

繩<sup>ッ</sup>結<sup>ッ</sup>ら<sup>ッ</sup>ま<sup>ッ</sup>ん<sup>ッ</sup>を<sup>ッ</sup>法<sup>ッ</sup>ふ<sup>ッ</sup>や<sup>ッ</sup>ま<sup>ッ</sup>し<sup>ッ</sup>髻<sup>ッ</sup> 黄接

能<sup>ッ</sup>石<sup>ッ</sup>を<sup>ッ</sup>赤<sup>ッ</sup>石<sup>ッ</sup>も<sup>ッ</sup>意<sup>ッ</sup>の<sup>ッ</sup>乃<sup>ッ</sup>法<sup>ッ</sup>こ<sup>ッ</sup>ひ、

至<sup>ッ</sup>極<sup>ッ</sup>世<sup>ッ</sup>藝<sup>ッ</sup>て<sup>ッ</sup>用<sup>ッ</sup>子<sup>ッ</sup>如<sup>ッ</sup>り<sup>ッ</sup>婆<sup>ッ</sup> 女媒



忙、然と逗るあのをと流女媒  
 うろ鉄炮の音が費る 芙蓉  
 別疎の子を愛よと流女媒  
 よい風ハ何處六道の過 女媒  
 迷ふ 周章して又思案、  
 暁まき月のごうはめて居る 黄樓  
 見留子括めて提くぞんと泰、  
 ひと里の世理子佩、身将 女媒

ウ

女房と遊ぶ淫をよ詠め、  
 吾續の具翌ハ淋しい 芙蓉  
 大畧を又か流したと名集し、  
 引ぬきて華事ハ总的蒼々やう 女媒  
 後りびらりし 鞞靴の 巻 執筆



歌仙

澁へ行道踏まよひ 氷の南 寒白

さうと神母の冬の煙を傘 女媒

大夢清ホウ投ぬ物をほうらせし

よう出ぬ飯登もせぬ冷ふ 寒白

目を針程ふ魚は何もなほ

片法ハしぬまゆ川と刺躰 女媒

夢川ワのうきと飛石は根一掬

眼葉乾く仏檀の下 言ふ

け山は新せぬ程の流及ぬし

まき子マキのぬまきと花まらぐぬ 女媒

五十荷の管管乃環り鳴續く

舟へ言傳わめうんて居る 寒白

天満さすこ白雨を足せぬ也

月影もよせ法をぬ致を火 女媒



之枚の紀行の中子持病二友 女媒  
 法当能神へちよめと願 寒白  
 江戸て嘆息をり此茶を清合せ  
 折子能ぼめて見せる愛風巾 女媒  
 乃と能ある所もよめ身持  
 行ゆゆりもせ居るまのの竿 言白  
 於倍の儀 風子漬をせり  
 ちろし 師走兄ゆ 一階 女媒

家柄ハ産まうしの言二人  
 流さ おやまが 軒かくもり 言白  
 盆の月精進坐てむ道はま  
 巻きさし 龍山雀の 巻 女媒  
 お能見も思ひの外に坐り 曠  
 何れハ縁多村 平沙 漸く 言白  
 町人さよえお能見ハあせま  
 遠々の目よあらし 盆石 女媒



代

ウ  
わらわらういづち丹ききたふらね  
よみ中房うらまあり風ひく寒白  
降着て拭へとあまほきせし  
賜のあつらひの基をころし  
是のき柳深まらりも詠詠至  
よく能を知り苗代の水執筆  
女媒

歌仙

人もわ美こねん彼岸梅哉 菖貨  
夢は流るもえへ一葉の香 女媒  
厚しと妻連ぬくの笠提し  
えんそ夜し擬室珠此散 菖貨  
清輝の見あむ練き空の月  
六重ハハ初ウと子指の穂り出ろ 女媒



萩為 児まり 風よりやうがねし 女媒

中紗くぬふ 腕の塗下駄 草貨

意知り此部より 船きこひ

ちり人形の 越りきぬ 形り 女媒

暑痛の せし 聞ては 踊りきこ

子 夢を 夢を 夢を 蛇 草貨

銅猿より さいりきこり 九折

破きやうと 芭蕉より 女媒

名月より 月も 夢を 夢を

秋の 風情は 外より 尾 草貨

昼堂の 夢を 夢を 夢を

傘と 右支の間より 明き 女媒

阿るく 鷄籠も 夢を 夢を

夢を 夢を 夢を 凡

一浦を 夢を 夢を 夢を

小ま 淋しく 伯母の 曲を 草貨



ささやうの浦とよけぬまき水仙花 菖貨

之井石山とほいよ古きま

醒る今ねぬまびりふの五郎丸

身と片練えゆり 衝 立 女媒

多代御 辰が山 帰来

阿比輪侍が登根よ月代 菖貨

四十雀 弛走よ 山 五十雀

沼柿 ぬ繁 何く ぬ 貞 女媒

掃ッも自身一日大工 去ナナノ日

車よまゝく 節吹子 け 菖貨

勾當りまゝして 辰が山 帰来

合其店子かかろく 辰が山 戸

是も笑ッ日並 兄則と雲 けろ 女媒

やうぬ 榊木の 影もうらら 執筆



歌仙

日を送りて又日を送る時を哉 桐圭  
かりの道をも冬枯の犬 女媒  
湖の水一筋 川へ流すもそ  
蛇鱗は石の指よりし 妹 桐圭  
誰も沙汰まねと八月十三夜  
葦 籠子 翌の夜へ 女媒

園取のかげも 後を寄見よれ  
初冬の雪性も 結んぬる 又 桐圭  
其の後の二年物も 谷川立  
店の 繰りけ 贅をよ 武士 女媒  
密談が かんしや 折く 時直も 甚る  
雪う ちまうと 儘 空うら 此 雨 桐圭  
杉の 風 起きと 下 用よ 巻い 桐圭  
殊に 桂の 影ハ 涼し 女媒



魚干の一日習ひの 藤がむ 女媒  
河津ぐも拍子 蕨 織る者 相主  
いりしれい方圖も形しふふ  
白後の 藤生此光里かやく 女媒  
二  
喜寂中丹喜もちのしに旬のむ  
中門の今時と 侍女り 敵 相主  
あま見よと一本松よ一軒屋  
用 絢法と ぬるる 續 經 女 媒

梅の 苦勞此の望し 清の裏  
むいと 梅あき 雪よ 朝起 桐主  
せいのさい大晦日より小晦日  
結合まはと りあさ 齡と 女媒  
神玉のしもうと伸し枝のうが  
喜雲の 唐津も 繩景 相主  
あひ路 枝りえ 舟板の なるし  
女 新こつ 誦 と 線 女 媒







去又使<sup>ウ</sup>を金ゆり詠めて這入<sup>レ</sup>使者 女媒

あふい<sup>レ</sup>性<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ふ 鶏 史江

綿木の比<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>改<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>け

や川と望<sup>レ</sup>長<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>呼<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>ル<sup>レ</sup>又 女媒

丁稚と丁稚<sup>レ</sup>福<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>と

焼<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>り 史江

又<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>友<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>侍<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>は

思<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>程<sup>レ</sup> 掃<sup>レ</sup>キ<sup>レ</sup>縁<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup> 女媒

堤い<sup>レ</sup>ぢ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>ば<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>場<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>遊<sup>レ</sup>ぶ<sup>レ</sup>人

外<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>象<sup>レ</sup>鼻<sup>レ</sup> 史江

幕の幕<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>厚<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>吹<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>せ

目<sup>レ</sup>み<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>程<sup>レ</sup>ね<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup> 女媒

さ<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>雪<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>湯<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>駄

蒙<sup>レ</sup>衣<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>研<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>尖<sup>レ</sup>史江

隙<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>滝<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>下

ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>夜<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>汀<sup>レ</sup>史江 女媒



重慶の如くの重録可也し 女媒  
力阿古科 あり人幹 史江  
大井川越るも其る為去又燕  
ささげあふれ 肌言た 然  
阿古中やうでハ月も 然る 等 女媒  
續子ハ 微菴夫の 庖丁  
天人の 器量 評判程より 如く  
あつと 形も 洗くま 湖 史江

夕  
君を此の ぬきを 入り 米能御  
世に 坐る 車一 讀仕まふ 本 女媒  
又う 此の 清子子 此の 妙の 新  
阿古 交し 此の 是 柴 此 戸 史江  
陣 植子 坐る 一日 是 妙 此 女媒  
風 中も 物 此 是 青 此 空 執筆

先  
三二八



歌仙 歳旦

明け初く松よ春さけ日新哉 兼春  
 阿房若若音 げりり 元朝 女媒  
 ちよと見る多も鳥よ知法を乃て  
 ハッ晴の傘 急よおもせぬ 兼春  
 眠もとも 孫もくがさだ 屋の月  
 空箱ひとの 稻舟の上 女媒

さ海見よや二百十日のぬる、  
 模搦しよ 妻若若也 兼春  
 懼のやま〜里お呼 途返るく  
 湯杖く押さき〜魚のあら 女媒  
 道はれの婆 世話やいえるまに  
 る後若若御ら 庭よ一まの 兼春  
 馬盟の湯きも 効いて夕 嵐  
 追々 軽薄 去ニまの 客 女媒



世

代

三十九

目よひらり 極まり 役者附 女媒  
 早合点を追うけて 兼菰  
 朝後でよつ 急ぎをひらり  
 幕の物見子 余寒おぼへ家  
 二 お徳子 田螺も 志のこ とい 昔ぬ 女媒  
 あいあいの 妙る 飽きやう  
 穢人々 又かひ路の 連と成 兼菰  
 新されをせぬ 面白の 半一

其上くう 一 法を結 尻く首 女媒  
 一遍まり 海 留まの 網猫  
 画はる 後ハ 初梅 逢さう 兼菰  
 月も 鮎子 紙燭 暗成り  
 積塔の 夜更 大勢 過り 兼菰  
 算笥も せう 巻やうで 賣物  
 鶯鳥 啼さい 時子 鳴ぬら 兼菰  
 朱の 香井り 小社を せ 兼菰

代

四十



湯をきりて白待りけし一嵐女媒

坐うど用おし長い口上

石櫛子流る雨の影ほらし兼菖

踏おももむだ糸をえきうた

又さぐもふ大舟の諸白髪女媒

錦木ふ束ま日かやく執筆

四季

あけやあけの笠あけと源三位椿阿

わかささ子り孫さる飯と干飯哉

石月や常とるおとね酒金の號

空の葉や流るる外戚飯

四季

初春風の思ひをけ之家の松 菖貨

三ヶ月の船漕、風の早苗哉



踊るのまぬし子一鐘の夢 草貨

待春哉梅の巻や深山獨活

四季

春雨よ流る是れ見ゆ柳哉 東洋

夏

紫の茂る時のま紫え青嵐

先一紫林へやり込る折哉

正のさ鴻春く通りし時をれ

四季

唐様やお祈り柳の草遣はト猶

猪首めく敵衆をろく玉椿

月雪此似せ物師の山ささる

宇治一見して

頼政の端もい法色 絃歌

五

海をり此やうに梅さる 櫻壳



相も糸の細工や紫鷄頭卜獅  
初雪や流の鏡昔は画キ心

やよみ初はるこ但列紫條  
此温泉は湯こそ卯月頃より  
ふも湯掛り

途中吟

谷川や春を惜ぬ水の音 知東

丹別但馬の界登尾と云  
る涼風の後景よみくも照し

登尾やあきの新け 點れ乃

湯一ま雨中の吟

春雨や昔を濡るく控湯下駄

山家よ一日をおぼる

ひとり山如さうくさ花の雨

湯の一まは更衣

湯を表水をうらむあ給うれ

折く杜宇の啼きると難  
波の響きもあはれ

関の湯のたふす時



水邊の流る

湯の湯に流る涼しかなるを 知東

大津屋某より湯の湯を  
を惜一旬を過ぎ

わづら湯の湯に涼見よ其れ多楓

多道より予の旅宿を訪ひ  
多の文の真よ

知東夫婦の但馬此湯平  
ゆづらと聞ても其家の  
ゆづらと尋ねるよ其れ多楓

主人志願するに

あつたいしきをともむるに柳哉 婆東

歌仙

津輕蘇ヶ沢連中

足弱ハ 女人堂まゝ山ささぐ 禽翁

歩きはは蝶の雪吹後 檜 浪翁 五楓

四日汐岩の舌折せハくして 虎 鹿文政 五

心もさかしく 毒のぞら 空 鷺白

柗打く五六丁り 十七夜 五楓

鐘の聲をこ川虫の耳 禽翁



あまうらな娘の太る芳の如 鶯白  
 端坐く人より色も温純 虎姫  
 剛の者なまもぬ書を持 禽翁  
 縁子の常鳴り時り極楽 子悦  
 比浦の由来よ交る意 衣 虎姫  
 教よ恥を砂を十哲 鶯白  
 細縁し火の物形乃 瘦房 五松  
 月緒たよ蚊の音も入 禽翁

久目あり事生澄のちりり 鶯白  
 誤り聞よ母うと 紋 虎姫  
 肩脱けハ風もきくハ 葉の真 禽翁  
 池ハそくもきくハ 月花空 五松  
 妻を嫁よ夏ハ 葉也通 馬 虎姫  
 杖子の主人云ハ 西足 鶯白  
 口説きも芥子の泪より 五松  
 涙の 敵よ 下細を解 禽翁



物々 七十五日 後の朝 鶯白

沸る舎りあゆみ人む村 虎姫

番匠の職人めかぬと芥子立 禽翁

水滸きししき月 五枕

川越り踏敷きゆくの霜 虎姫

本草り味付る 木食 鶯白

減度り何とやまゝい 松管 五枕

急りり世界えくく様へ 任 禽翁

影の器用りある 数もり 鶯白

む川くと起る浴る程 水 虎姫

塩ゆきに塩をゆきとや族の空 禽翁

喧笑の仕舞はるぬ二ツ家 五枕

入相ハ茶巾の熱きとめは時 虎姫

玉差筆乃びく初雷 執筆



歌仙

懸ヶ沢連中

唇ハ 菊 向 け 梅 の 花 虎 姫

州 の 事 も 世 も 揚 子 風 紫 白

珠 生 空 片 衣 地 走 人 傘 提 へ 五 梳

尻 又 繰 回 る 坂 一 場 の 杭 虎 姫

黒 餅 ハ 扇 の 月 丸 因 西 紫 白

畠 又 飯 乃 煮 る 草 勢 五 梳

ウ  
志 や ち こ ね の 浴 衣 を 教 を 風 呂 上 巳 虎 姫

口 舌 又 負 け て 標 疽 煩 小 紫 白

潮 と 吸 ち こ 斗 へ 船 ち 著 五 梳

義 理 又 生 れ ぐ 世 の 外 又 添 小 虎 姫

似 々 夢 又 片 川 立 止 め け り 袴 門 と 夢

國 の 毒 付 と 葉 一 伯 采 紫 白

蓋 又 凡 そ ち 雪 の 浮 ぐ 醜 一

下 又 又 昇 ち ぐ 定 ち ぬ 峯 五 梳



代

此月河系五浦の鏡も法五瓶

讀く仕草とまじり乃顔色 虎姫

生きてはまじり花の昔も坊り

吹日ハ摺合ハ子蕨 等白

二月ハ娵春ハの神堂月

果報の身ハ屋川まりとね 五瓶

大船の尻ハ吞ハ丸太舟

下戸の妻ハ一墮るね伴 虎姫

葡萄ハ形リハ教り草のま 等白

洞帳おとた 質至出 秋迦 五瓶

二親ハ明テよしと 玉子箱 虎姫

某の毒と足ハ川 眞 等白

産より毒と惱と 砂 五瓶

口ハ笑ハく 和ハのふ 石 虎姫

桂男ハ法き 島ま 等白

夏の 獲目ハ 灰ハ 水 等白

代



織姫の食はれし 望月五流

加増色を以て終りき 鳴虎姫

片思ふ心は法華 門徒宗 白

朝は道を閑く 扱し 五枕

七福の中よとりの 雲の良

さうと 呼ば雲よ入 翹執筆

歌仙

蘇ヶ沢連中

温石の窟 かりき里 夏川原 鷺白

蝉 降志あり 物いもぬ 森 五枕

市機嫌を寝ふ 暮もも 負う終て 蝉人

笈のそ 吹 笑らせよ 夢ある 風歌

名月よ 夢の 嘆き 油賣 虎姫

五月の外よ 吹と 秋風 執筆

弋

四二



川端のら子柳を 殺し 五枕

死しては可く徳子 忙し 五白

娘の胆を 希 育 鳳歌

借沙もくを 時り 傾城 蟬人

及半待来ハ 風の遊ハ 帆登舟 虎姫

百ま〜 活し 村中 の下 五枕

高商 臨是 一 轉る 虎 泊 糖 雪 白

氷柱の 瘦乃 愈る 夕月 鳳歌

飛鳥 色 己り 樹々 羽を 干 蟬人

装束 舞子 為る 藤 籠 空の 秋 虎 姫

茶 咲く 世々 控さき〜 昼 火 燵 五 枕

志の 中 眠 里 此 花 ぬ 岩 底 雪 白

貝合 是 如く 美人の 夫ハ 權 鳳 歌

私用 色 目〜 女 代 参 蟬 人

口上 子 後口〜 投乃 河〜 子 髪 虎 姫

折 花乃 待 花 焚 火 是 讀 五 枕



代

洞突子降海一帯の竹の雨 響白

風々鳴き松々鳴 風 鳳歌

多い時の力たまりは 腰を掛 蟬人

外科くり日くまをぬ 禪 虎姫

夏の月影さぬホリ扱を更し 五松

耳目の器を動かす人間 響白

立身子思ひ出せを九折 風歌

書法故く 深長 神 國 蟬人



